

竹富島方言アクセントと「系列別語彙」：
附 竹富島方言版「北風と太陽」

ローレンス, ウェイン / LAWRENC, Wayne

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2013-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012501>

竹富島方言アクセントと「系列別語彙」 — 附 竹富島方言版「北風と太陽」 —

ウエイン・ローレンス

1. はじめに

2011年2月に『竹富方言辞典』（前新 2011）の大著が出版され、これで竹富方言の語彙がほぼ網羅的に検索可能となった。だが、この辞典の本文編に採録されている17,000余の単語のうち、音調の式を表す符号が付いているのは489語にとどまる。¹ 本稿では、今後の比較研究のために竹富方言のアクセント資料を公表する（3節）とともに、単語を二十ほど取上げ、それぞれのアクセント的系統の解明を試みる（2節）。

琉球語の多くの方言の場合は、単語の長さに関わらず、多くの語は二つないし三つの音調型に収まることが崎村（2006）所収の一連の研究によって明らかになった。松森（2000）は琉球語の史的研究のために、各音調型の所属語彙（特に琉球語に特徴的な俚言）を決定し、「系列別語彙」の開発の必要性を訴えている。本稿では竹富方言の語形を出発点に、他方言との比較によって琉球祖語におけるその対応語形の音調系列の特定を行う。

八重山の方言は、音調型が三つある与那国方言を除いて、基本的な音調の型は二つある。竹富方言においてこの二つの型は平板型（符号の0であらわす）と起伏型（2であらわす）と特徴づけられている。音調型を三つもっている琉球方言（与那国、多良間、今帰仁、沖永良部島皆川などの方言）との比較から、竹富方言ではA系列語彙は平板型音調、B系列とC系列語彙は起伏型音調で発音されるという対応関係が見出される。A系列、B系列、C系列というものは特定の音調そのものではなく、祖語の段階で、ある（まだ不明の）音調で発音されていたと仮定できる単語の集合である。現在のある特定の方言では、同じ系列の単語は、原則として、おなじ音調で発音されるが、その音調は方言によって異なる。八重山の多くの方言ではB系列とC系列の音調の区別がなくなり、これらの方言における「系列」と音調の関係は次のようにあらわせる。

A系列音調 — 平板、 B・C系列音調 — 起伏

竹富、鳩間

A系列音調 — 起伏、 B・C系列音調 — 平板

石垣、新城、古見

以下、比較する時、平板・起伏など具体的な音調に言及する代わりに、A系列音調・B系列音調などの用語を用いる。

2. 「系列別語彙」決定によせて

本節では竹富方言の単語を20ほど取りあげ、他方言にある同系語の音調と比較することを通じて、琉球祖語形の音調系列を推論する。竹富方言の例は名詞を先に、動詞を後に、それぞれ音節数で短いものを先に、そして同じ音節数の語はアルファベット順に (a は a の位置に) 並べて扱う。

ai 0 「口蓋」

竹富方言のこの語形はA系列対応の平板型音調である。石垣方言も鳩間方言もA系列音調の ai (宮城 2003 : 7; 加治工 1982 : 391) で、意味は「口蓋」である。北琉球の対応語形は *agi系で、「えら」が中心的な意味になる。奄美地方の諸鈍 (ak - 狩俣 1996 : 31, 37) と与論麦屋東 (agi - 菊・高橋 2005 : 20)、そして沖縄の今帰仁村与那嶺 (azii - 仲宗根 1983 : 9) と首里 (azi - 国立国語研究所 1963 : 129) もA系列である。琉球祖語形としてA系列音調の *agi が再構築できる。なお、このアギは現行の類別語彙表 (金田一 1974 : 62-73) (以下、金田一語類とよぶ) に入っていないが、2類の単語であると考えられる。² 金田一語類の2類名詞は規則的に琉球語のA系列に対応する。

cii 0 「釣り針」

「釣り針」は八重山では鳩間の sii³ と石垣の cii (宮城 2003 : 539) の語形が報告されており、竹富方言の語形同様A系列対応の音調である。奄美方言には沖永良部島皆川 c'in (上野 2006a : 9) と与論麦屋東 cii (菊・高橋 2005 : 299)、沖縄方言には今帰仁村与那嶺 cii (仲宗根 1983 : 245) があって、これらもまたA系列音調になっている。大宜味村田嘉里 cii (ローレンス 2005 : 68) と伊江島sii [si:] (生塩 2009 : 210) のA-C系列音調はこれと矛盾しないから、「釣り針」を意味する琉球祖語形はA系列であったと考えられる。そして伊江島の口蓋化しない sii [si:] から考えて、祖語形は *ti ではなく、*tu と再建される。⁴

ssju 2 「甲斐, 効き目」

本土日本語の代^{しろ}に対応するこの竹富方言の語形はB-C系列音調である。石垣方言の対応語形は ssu 「代価, 代償」(宮城 2003 : 592) で、これもB-C系列音調である。⁵ 沖永良部島皆川のス suu 「お返し」(上野 2005b : 201)、今帰仁村与那嶺の siruu 「代り」(仲宗根 1983 : 198)、首里の siru 「代わりとなる物, 代価」(国立国語研究所 1963 : 483) はみなA系列音調で、伊江島の sjuu 「代償, 代わりの物」(生塩 2009 : 193) はA-C系列音調である。与論麦屋東の sjuu 「代わり, 代用」(菊・高橋 2005 : 258) はB系列音調である。南からB-C (八重山) - A (沖縄) - B (与論) - A (沖永良部) と系列対応音調は一定しない。北琉球ではA系列音調が周囲分布になっており、古いといえそうであるが、南琉球のB-C系列音調と北

琉球のA系列音調とではどちらが故態か、これだけの琉球語資料からは決定できないのである。だが、本土日本語の語形に目を向けてみると示唆が得られる。京都語の代は高起式無アクセント（H0）で、⁶ 金田一語類の1類対応アクセントである。岩手県雫石方言では代は自立形として使われないようであるが、surokagi「代掻き」という複合語のアクセントから、代は^{しろ}1・2類対応アクセントであると考えられる。⁷ 本土日本語の1・2類名詞は琉球語のA系列に対応するから、琉球祖語の *siro はA系列だったと考えられる。

tən 0「ダニ」

石垣方言の語形は竹富方言のと同様、A系列対応音調である。北琉球方言では、徳之島浅間 tan（ローレンス・岡村 2009：176）と大宜味村諸方言の tanni（ローレンス 2010：121）はともにA系列になっている。伊江島の tai（生塩 2009：240）と伊是名の tai（伊是名島方言辞典編集委員会 2004：332）はA・C系列で、琉球祖語形としてA系列の *tani の再建を可能にしている。⁸

too 0「平坦地」

竹富方言のtoo「平坦地」は石垣方言のtoo「低地」（宮城 2003：660）と鳩間方言のtau「窪地」（加治工 2002b：70）と同じA系列音調の名詞となっている。奄美方言では諸鈍の too「平地」（Serafim 1984：196）、徳之島浅間の too「小高く平らな所」（岡村 2007：70）、沖永良部島皆川の too「平地」（上野 2006a：26）、与論麦屋東の too「平坦（地）」（菊・高橋 2005：363）、沖縄方言では今帰仁村与那嶺の too「平坦地」（仲宗根 1983：321）、首里の too「平坦（地）」（国立国語研究所 1963：523）も揃ってA系列である。日本語の撓^{たわ}と同源であろうが、沖縄と八重山の発音が *taa になっていないことから、琉球祖語ではこの語形はA系列の *tawa ではなく、*tau であったと考えられる。⁹

zii 0「字」

「字」と「地」は北琉球諸語では同音異義語で、ともにB系列の音調になるが、八重山では「地」がB系列音調で発音されるのに対して、「字」はA系列（石垣（宮城 2003：393）、竹富、古見（加治工 1998：306）、鳩間（加治工 1961：28；平山ほか 1992a：1112）、与那国（上野 2010：19））である。宮古の多良間では「字」はC系列音調で発音されている。¹⁰ 「字」も「地」もともに金田一語類では3類相当の単語である（金田一 1980：92）から、「字」は元来B系列の名詞で、八重山でこの語だけが不規則的にB系列からA系列に移動したといえる。もし「字」が南琉球方言において借用語であるとすれば、この系列移動は「地」との同音衝突を避けるために起こったと推測できる。

attu 2 「明後日」

『竹富方言辞典』は 0 とあるが、インフォーマント（本稿の謝辞参照）の発音は起伏型(2)で、こちらの方は石垣 (asitu – 宮城 2003 : 35) と鳩間 (asitu – 加治工 1992 : 85) の B-C相当音調と合う。与那国の asati はC系列（上野 2010 : 4）で、北琉球の沖永良部島皆川 (asati – 上野 2005a : 11), 与論麦屋東 (asati – 菊・高橋 2005 : 23), 今帰仁村与那嶺 (hasaati – 仲宗根 1983 : 46) と金武 (asati – 松森 2009 : 117) もC系列なので、祖語形はC系列だったと思われる。徳之島浅間の対応語形 asjatii (岡村ほか 2006 : 117 [1611]) は長母音の位置からB系列であることがわかるし、亀津の asati の音調もB系列である（平山 1986 : 28）から、「明後日」のC系列からB系列へと移動するのは徳之島の一部の方言に限られた変化のようである。¹¹

burə 2 「法螺貝」

石垣と鳩間も竹富と同様B-C系列対応の音調である。多良間（松森 2010 : 499）, 与論麦屋東（菊・高橋 2005 : 509）, 沖永良部島正名（松森 2000 : 67）, 徳之島浅間（上野 1996 : 29）, 旧名瀬市^{あしけぶ}芦花部（上野 1996 : 29）の対応語形がC音調なので、琉球祖語形として「法螺貝」はC系列語として再建できよう。なお、沖縄方言は今帰仁村与那嶺, 金武, 首里, 那覇の対応語形はみなA系列なので、沖縄方言の方でC系列音調からA系列音調への変化があったと想定できる。

inno 0 「砂」

この語形は石垣の inoo（宮城 2003 : 106）, 古見の inun（加治工 1998 : 266）, 鳩間の inon（加治工 1993 : 76）とともにA系列音調である。多良間の nnagu「砂」（松森 2010 : 499）, そして遠く離れた沖永良部島皆川の同系と思われる ?njaagu「石灰質の石が風化してできた土」（上野 2006a : 44）もA系列音調であるから、*inago はA系列として再建できよう。なお、宮古の池間方言の nnagu「砂」のB系列音調（五十嵐ほか 2011）は例外と考えたい。*inago > ino(n)の変化がどのように遂げられたかはなお検討を要する問題である。¹²

juki 0 「小型の斧」

竹富方言のこの語形は石垣方言の juki（宮城 2003 : 1171）と鳩間方言の jukki（加治工 1990 : 86）と同じA系列音調の名詞となっている。多良間の juki（松森 2010 : 498）もA系列音調である。しかし、北琉球の奄美大島名瀬 (juki – 寺師 1956 : 4, 7), 徳之島浅間 (juuki – ローレンス・岡村 2009 : 175), 沖永良部 (正名 juuki, 知名 juki, 和泊 jucci – 松森 2000 : 68), 与論麦屋東 (juiki – 菊・高橋 2005 : 608), 今帰仁 (juci – 仲宗根 1983 : 590), 金武 (juuci – 松森 2009 : 116) はすべてC系列音調である。本土日本語を見ると、『類聚名

義抄』の高高音調（僧中 三五）、大阪方言のH0 音調および十津川方言の中高音調（大島ほか 1979：203, 395）は 1 類対応音調で、鹿児島方言の語形の A 型音調は 1・2 類対応である。愛媛県大^{おおしまひが}三島肥海方言の語形は低高音調（藤原 1988：829）で、これは 2・3 類対応音調であるが、古い『類聚名義抄』の資料と時代的にも地理的にも離れている鹿児島方言や十津川方言を重視すれば、本土日本語祖語の *joki は 1 類所属の単語であったと考えられる。1 類名詞は規則的に琉球語の A 系列に対応するから、琉球祖語の *joki は A 系列名詞であったと考えられ、北琉球方言ではこれが C 系列音調に変化したと解釈できよう。

juni 0 「陸から海に突き出た砂地」

八重山の石垣の juuni 「洲」（宮城 2003：1167-8）と鳩間の juni 「州」（平山ほか 1992b：2551）、そして北琉球の首里の juni 「米, 砂」（国立国語研究所 1963：290）と与論麦屋東の juni 「地名（自然海流によって真っ白い砂が寄り集まるユニヌパマー帯の海の名）」（菊・高橋 2005：617）は、竹富方言語形同様、A 系列音調である。『類聚名義抄』（法下 二九）では ヨネ「米」は 1 類対応の高高音調になっており、琉球語の A 系列と規則的な対応を示している。多良間の juni 「粟」（A 系列音調）¹⁰ と喜界島諸方言の junī 「灰」（A 系列音調）¹³ は同系の単語であると察せられる。「米」は白くて粒状のもので、「砂・灰」は白くて粉状のものである。「洲」は水の中からあらわれる堆積した砂のことであるから、白くて粒・粉状のものをヨネ系の語形で呼ぶようになったと考えられる。「粟」は白くないが、米との類推でヨネ系語形が使われるようになったであろう。

kāmi 2 「亀」

この音調は石垣方言と与那国方言の B 系列に対応し、鳩間方言と古見方言の対応語形は A 系列の音調になっている。八重山以外では多良間方言も A 系列になっている（松森 2010：498）が、北琉球は B 系列の一色である。¹⁴ 本土日本語の「亀」が 3 類に（一部の地域では 5 類に）対応するアクセントになっていることから、琉球方言の B 系列が故態で、A 系列音調の発音は南琉球の各地で不規則的に生じた改新形であるといえる。

māiccjə 2 「女性用下帯」

「女性用下帯」は与那国の mait'a が C 系列音調（上野 2010：12）で、沖縄北部大宜味村の meecaa（ローレンス 2010：119）と伊江島方言の meecja（生塩 2009：504）も C 系列音調である。古見方言（maicjaa - 加治工 2001：65）と竹富方言の B-C 系列音調を考え合わせると、祖語形は C 系列の名詞として再建される。音調は不明であるが、奄美地方からは徳之島尾母方言の mēēcja が報告されている（徳富 1975：147）。

nəmi 0 「波」

八重山のいくつかの方言の中に、*nami 「波」に起源をもつ形式が二つ見出せる。

		石垣	鳩間	竹富	
A系列音調	—	nan	nami	nəmi 0	「波」
B・C系列音調	—	nan	nan	nən 2	「津波」

「波」は金田一語類では3類で、与那国方言、多良間方言、そして北琉球の諸方言では規則的にB系列対応の音調型であられる。このことから、石垣・鳩間・竹富の「津波」を意味する語形が本来の「波」の発音を継承する語形で、A系列音調になっている「波」を意味する語形は借用語である可能性が高いといえよう。

nzju 0 「地面などに掘った溝」

竹富方言のこの語形はA系列対応の音調である。石垣方言の nzju (宮城 2003 : 1216) と古見方言の mizjuu (加治工 1998 : 276) はB・C系列音調であるが、与那国方言の ndu (上野 2010 : 28) と鳩間方言の mizu¹⁵ は竹富方言と同じA系列音調である。沖縄方言は、沖縄北部の今帰仁村与那嶺 zjuu (仲宗根 1983 : 272),¹⁶ 久志 wizju (古波蔵 2003 : 74), 金武 nnzju (松森 2009 : 109)、沖縄中南部方言の久米島真謝 nzu (仲原 1997 : 48), 渡名喜島 nzju (高江洲 2002 : 244) はA系列対応の音調で、沖縄中南部方言の首里の n(n)zu (国立国語研究所 1963 : 438), 那覇の nnzju (内間・野原 2006 : 321), および旧玉城村奥武 nnzju (大山 1962 : 56) はB・C系列対応の音調で発音される。奄美方言では、旧名瀬市芦花部 mido (上野 1996 : 29), 徳之島浅間 miizju (上野 1996 : 29), 沖永良部島皆川 nizju (上野 2006a : 43), 与論麦屋東 nizju (菊・高橋 2005 : 393) はC系列対応の音調で、諸鈍 mizjoo (狩俣 1996 : 27, 48) はB・C系列対応音調である。

「溝」は金田一語類に入っていないが、松森 (2009 : 100, 109) は「溝」を 1 類の名詞として掲げており、これは妥当と思われる。¹⁷ 本土日本語の「溝」が 1 類であるとすれば、琉球語のA系列は本来の規則的な対応形で、奄美祖語の段階でこの単語がB系列の音調に変化し、そしてこれとは独自に沖縄中南部の多くの方言や石垣方言と古見方言において「溝」はB・C系列音調に変化したと推測できる。

sənə 2 「傘」

この語形は現在は南琉球特有のものであって、中国語の san 「傘」に由来すると思われる。石垣・竹富・古見・鳩間の各方言ではこの *sana はB・C系列音調で、与那国 (平山 1988 : 721), 多良間 (松森 2010 : 500) および池間 (五十嵐ほか 2011) ではC系列音調であるから、

この *sana はC系列の単語として南琉球の方言に入ったことがわかる。借用語である故にC系列におさまった可能性がある。

səni 2「果物の種」

*sane「種」は金田一語類に含まれてはいないが、3類の単語であるといえよう。¹⁸ 竹富方言の səni 2も、石垣方言（宮城 2003：374）と鳩間方言（加治工 1988：190）の語形もB-C相当音調で、本土日本語の3類と規則的な対応を示している。しかし、沖縄方言の対応語形はA系列音調で、¹⁹ また奄美方言もA系列の可能性もある。徳之島浅間では「独身男性」のことをA系列音調の sjanikei と言って（ローレンス・岡村 2009：175）、この中の sjanii- は「種」であると考えられる。また、同じ浅間方言では <実> と書かれる姓はA系列音調の sjaani（ローレンス・岡村 2009：177）で、これも *sane に対応すると思われる語形である。²⁰

本土日本語の対応形のアクセントを参考にすると、北琉球祖語の段階で *sane はB系列からA系列に移動したという結論に達する。

sjubə 0「心配」²¹

竹富方言の語形は石垣 sjuba（宮城 2003：453）、古見 sjuba ~ siwa（加治工 2012：48, 54）、鳩間 s(j)oo（加治工 1961：16; 1990：54）(< *sjua), 与那国 siban（上野 2010：13）のと同様にA系列音調になっており、これは沖縄の伊是名、今帰仁村与那嶺、首里のA系列音調と一致する。しかし、奄美地方の徳之島浅間 sjiwaa（岡村ほか 2006：60 [0716], 135 [1880.2]), 沖永良部島皆川 siwa(a)（上野 2005b：197）、与論麦屋東 sjuwaa（菊・高橋 2005：262）がB系列音調になっていることから、奄美方言においてのみこの語形が偶発的にA系列音調からB系列音調への系列間の移動を被ったというふうに解釈できる。²²

subi 0「尻」

南琉球では八重山の与那国 (nbi - 上野 2010：30)、石垣 (cibi - 宮城 2003：573)、古見 (cīpi - 加治工 1998：308; 2001：34)、鳩間 (sibi - 加治工 1987：111)、そして宮古の多良間 (cibitar - 松森 2010：498) と池間 (tibi - 五十嵐ほか 2011) はすべて竹富方言の語形と同じA系列の音調になっている。沖縄の今帰仁村与那嶺 (cibii - 仲宗根 1983：258)、首里 (cibi - 国立国語研究所 1963：143)、渡名喜 (cibi - 高江洲 2002：248) の対応語形もみなA系列である。奄美地方の「尻」は基本的に *mari という別の系統の単語になるが、沖永良部島皆川に cibi「(芋) 尻」があって、やはりA系列（上野 2006a：12）なので、琉球祖語形としてA系列音調の *tube が再建される。²³

tumə 0「苦」

この音調は石垣の tuma (宮城 2003: 648) と鳩間の tumaa (加治工 1989: 196) のA系列音調と一致する。北琉球方言の与論麦屋東 (菊・高橋 2005: 358), 今帰仁村与那嶺 (仲宗根 1983: 316), そして首里 (国立国語研究所 1963: 529) の対応語形もみなA系列であるから、琉球祖語形はA系列であると考えられる。「苦」は金田一語類に含まれていないが、1類であると考えられるから、²⁴ 琉球語のA系列は規則的な対応である。

sizi'izju 0「ダツ」

この竹富方言形は古見の sici (加治工 2001: 78) と鳩間の sizi (加治工 1986: 22, 23) と同じくA系列の音調で発音される。北琉球方言である与論麦屋東の sizii (菊・高橋 2005: 238), 伊是名の sizaa (伊是名島方言辞典編集委員会 2004: 271) もともにA系列対応で、またA-C系列である伊江島の sizi [sizi]「さより」(生塩 2009: 218) の口蓋化されない子音を考慮すると、琉球祖語形として *suzu (A系列) が想定される。²⁵

ukun 2「置く」

琉球語の場合、ごく少数の動詞(「ある」や複合語に起源をもつ動詞)以外は動詞はすべて二つの音調型に分類できる。²⁶ 一つはA系列音調と同じ特徴をもつものとして、A系列と分類されるが、もう一つの音調型がB系列に相当するか、C系列に相当するかはまだ不明なので、B-C系列と分類する。

『竹富方言辞典』にあるとおり、竹富方言の「置く」は起伏型(B-C系列対応)で、これは鳩間方言の ukun (加治工 1991: 60) と一致する。しかし、北琉球方言の「置く」はA系列音調で発音される。²⁷ 本土日本語の「置く」は1類アクセントの動詞で、これが琉球語のA系列に対応することから、琉球祖語の「置く」はA系列の音調として再建される。実は、竹富・鳩間の ukun が例外的にB-C系列対応音調になっているのは借用語であるからと考えられる。宮古方言では uk-系の動詞「置く」は補助動詞として使われるが、本動詞の「置く」は ucik-系の動詞になっている。この ucik- は「打ち+置ク」という、強調的な要素が前接してできた動詞であると思われる。与那国方言はB-C系列音調の utugun (上野 2012: 60-1) (/utuk-/) で、これは補助動詞としても使われる(平山・中本 1964: 143)。石垣などの八重山方言の多くはB-C系列音調の cikun や sikun が本動詞と補助動詞の両方をあらわす。すなわち、八重山方言では古い ukun が廃れて、替わりに新しい uci-ukun系の動詞が使われるようになったといえる。上記の鳩間方言の ukun の例(「垂木の上に瓦敷きを置いて釘を打ち付けなさい」)は特殊な意味で使われており、sikun「置く」で置換すると不自然になるという。¹⁴ 一方では、竹富方言の ukun はごく普通に使われ、「置く」の意味の cikun / sikun 系の語形は見当たらない。音調の不一致は、この ukun は古い語形

の残存ではなく、他方言（おそらく沖縄方言）からの移入語であることを示す。

hətəirun 0「^{はだ}開ける, 広げる」

本土日本語の^{はだ}開ける（古くは清音）に対応するこの動詞は竹富方言では、石垣方言の patagi(ru)_N（宮城 2003：785）と鳩間方言の patakun（加治工 1961：48）と同じくA系列音調になっている。北琉球方言では、徳之島浅間 hatējūn²⁸、沖永良部島皆川 hatajūn（上野 2006b：139）、与論麦屋東 pataijūn（菊・高橋 2005：426）、今帰仁村与那嶺 p^hataakin（仲宗根 1983：387）、首里 hatakiin²⁹ もみなA系列音調である。*patake- はA系列動詞として再建される。

hikirun 0「据える, 供える」

石垣方言の sikirun「供える, 据える」（宮城 2003：403）および鳩間方言の sikun ~ sikirun「供える, 据える」¹⁵ は竹富方言語形と同じくA系列音調である。北琉球方言では、徳之島浅間 sikijūn「供える」（上野 1977：26）、沖永良部島皆川 sikijūn「煮炊きの準備として鍋釜をかまどにすえる」（上野 2005b：186）、与論麦屋東 sikijūn「供える, 据える」（菊・高橋 2005：236）、今帰仁村与那嶺 sikiirun「据える, 神仏に供える」（仲宗根 1983：176）、首里 sikijūn「据える, 置いて安定させる」（国立国語研究所 1963：473）はみなA系列音調の動詞なので、祖語形としてA系列の *suke- が再建される。なお、音調の違いからこれは上掲の ukun の項であげた八重山の cikun / sikun「置く」とは直接結びつかない。

kəcīrun 0「掴む」

八重山では石垣、竹富、古見、鳩間、与那国³⁰、北琉球では徳之島亀津,³¹ 与論麦屋東、今帰仁村与那嶺、伊江島、首里の各方言にA系列音調で発音される *katume- に対応する動詞がある。宮城（2003：231）は「つかまえる」が音位転換をして「かつまえる」になったのではないかとしているが、*tukam-「掴む・捕まえる」は琉球の各方言を通じて B-C系列音調で発音する動詞（例：竹富 hikəmun 2）なので、音位転換と系列の移動がなぜ連動したのかは謎である。

3. その他の竹富方言アクセント資料

məijasi 2「ひんぶん」は『竹富方言辞典』ではməija(a)si 0 となっているが、インフォーマントの発音は起伏音調(2)で、これは加治工（2002a：84）の記述とも合うし、他の məi 2「前」を前部成素とする次の複合語とも合う。

məijəttə 2「家の前方」, məikəntə 2「前髪を伸ばした男性の髪型」, məipaa 2「前歯」,

məisirəsi 2 「病気の前兆」

動物などの雌雄の別は音調にも反映され、「雄」(bi-) はA系列音調で「雌」(mii-) はB-C系列音調である。

biidōō 0 「男」, biioo 0 「雄豚」, biipiizə 0 「雄山羊」, biitui 0 「雄鶏」, biiusi 0 「雄牛」,
biigaarə 0 「雄瓦」, biizinə 0 「雄綱」

miidōō 2 「女」, miiioo 2 「雌豚」, müpiizə 2 「雌山羊」, miitui 2 「雌鶏」, miiusi 2 「雌牛」,
miigaarə 2 「雌瓦」, müizinə 2 「雌綱」

これは多くの八重山方言と同じであるが、与那国方言の動物名は（少なくとも「鶏」は）音調の違いはなく、雌雄ともB系列音調になっている（上野 2010 : 25, 27）。なお、竹富方言の uu- 「雄」はB-C系列音調である（uuzinə 2 「雄綱」, uuzuru 2 「雄弦」）。³²

「長」にはnəgə- と naa- とがあり、naa- が起伏型の音調になるのに対して、nəgə- は時間的な長さをさす時は平板型音調で、空間的な長さをさす時は起伏型音調になるようである。

naabui 2 「遠吠え」, naahukubi 2 「長い帯」, naamici 2 「長道」, naasənən 2 「長い禪」,
naasin 2 「長い着物」, naasubi 2 「長居」, naasumi 2 「長い爪」, naatunəi 2 「長い筵」

nəgə'əmi 0 「長雨」, nəgə'əsubi 0 「長時間遊ぶこと」, nəgəhətərai 0 「長時間働くこと」,
nəgə'nəi 0 「遠吠え」, nəgəninbi 0 「長く眠ること」, nəgətəbi 2 「長旅」,
nəgə'tunəi 2 「長い筵」

指小接尾辞の -naa (1 a) と -ā (1 b) は、前接要素の音調の如何に関わらず、起伏型音調で発音される。これは鳩間方言の指小辞 -ama にもみられる現象である（ローレンス 1997 : 19-20）。

- | | | |
|--------|------------|-----------------------------|
| (1) a. | hwaa 0 「子」 | hwaanaa 2 「子」 ³³ |
| | isi 0 「石」 | isinaa 2 「石ころ」 |
| | mui 0 「丘」 | muinaa 2 「小高い丘」 |
| | tui 0 「鳥」 | tuinaa 2 「小鳥」 |
| | ii 2 「飯」 | iinaa 2 「握り飯」 |
| | oo 2 「豚」 | oonaa 2 「小さい豚」 |

ucjui 2「風呂敷」	ucjuinaa 2「小さい風呂敷」
b. həbu 0「蛇」	həbōō 2「蛇の形をした玩具」
ikə 0「烏賊」	ikāā 2「小さい烏賊」
izju 0「魚」	izjōō 2「小さい魚」
musi 0「虫」	musjāā 2「虫の卑称」
pini 0「髭」	pineē 2「ちょび髭」
nənicci 2「桑の実」	nəniccjēē 2「小さい桑の実」
NNZU 2「飯蛸」	NNZōō 2「飯蛸」

同様に、接尾辞 -ne(e)「の家」も平板型音調名詞から起伏型音調名詞を形成する (ənnē(e) 2「東隣の家」, innē(e) 2「西隣の家」)。

複合語は前部成素の音調型が複合語全体の音調型になるのは普通であるが、複合名詞の後部成素が sjuubu 2「勝負」の場合、複合名詞は起伏型音調になる (hikərəsjuubu 2「力勝負」(hikərə 0「力」), hwəisjuubu ~ hoisjuubu 2「早食い競争」(hwoon 0「食べる」), ninbisjuubu 2「寝つきが早いのを競うこと」(ninbun 0「眠る」))。複合名詞の後部成素 -kuunaa「競争」も起伏音調名詞をつくるようである (kuiku(u)naa 2「高跳び競争」(kuirun 0「越える」))。

(2)の次の例文中の名詞の音調を比較されたい (参照: turun 2「獲る」, kaasun 0「売る」)。三語からなる複合名詞で、語頭成素が平板型名詞で、その次の成素が起伏型の転成名詞のとき、その複合名詞は起伏型になる。

- (2) a. izjuturihitu-jəkənnə izjukaasihitu-nudu məsi
 釣り人より 魚売りのほうが いい
- b. izjukaasihitu-jəkənnə izjuturihitu-nudu məsi
 魚売りより 釣り人のほうが いい

他の例に izjuhoosi'itu 2「釣り糸」, izju'uciən 2「魚捕り用の網」, kəcjuhigikənnə 2「鰹節削り剪具」, məissjəiusu 2「米搗き臼」があげられる。鳩間方言における同じ現象に関してはローレンス (1997: 12-14) が説明を試みているので、それを参照されたい。

その他の名詞 (アルファベット順)

aatə 0「東の方」; əbu 0「洞穴」; ədə 0「無駄」; ədiənə 2「自分だけしか知らない蛸の穴」;³⁴ əhu 0「灰汁」; əi 2「間」; əi 0「蟻」; əmədə 2「炙り網」; əməmizi 2「雨水」;

əməmizi 0「真水 (甘水)」; əməmizikaa 0「真水の出る井戸」; əncə 2「ヤドカリ」; əpə 2「オニオコゼ」; əperə 2「家鴨」; əsəi 2「はなれ」; əsəkəi 2「朝の涼しいうち」; əsəkəi 2「朝粥」; əuzi 2「祖父」; ba(a)kki 2「竹で作った籠・箆」; bəi 2「芽」; bəjaa 2「私達 (話し相手を含む)」; bənaa 0「私達 (話し相手を含まない)」; bənoo 0「私達 (話し相手を含まない)」; bənu 2「私」; bəinaa 2「小さな芽」; bicci, biccjāā, biccjēē 2「芽」; bidu 0「魚の餌」; bii 2「栓」; bii 2「注ぎ口」; bii 2「藺」; birə 2「葦」; bubāā, bubəmə 2「おば」³⁵; buraa 2「巻貝の総称」³⁶; buunu 2「斧」; denwa 2「電話」; duru 2「泥」; durupən 2「泥足」; gəi 0「反抗」; gəiziru 2「大きな蓋付き籠の一種」; gən 0「竈」; gəsəmi 2「渡り蟹」; gəsəmemə 2「小指」; gəzjən 2「蚊」³³; gii 0「意地」; girə 2「碑礫貝」; goorə 2「大きい悪性のおでき」; guri 0「沈澱物」; guu 2「仲間」; həjusə 2「隼」; həkə 0「墓」³⁷; hərōō 2「蟹の一種」; hikubēē 2「ひも帯」; hikubi ~ hukubi 2「帯」; hokkəru(u) 2「赤しょうびん」; hudai 2「柄杓」; hukədaa 2「深田」; hukui 0「埃」; hunihu 2「蜜柑」; hunkun, hunkuru 0「懐」; hutədiru 0「蓋付き籠」; huuəmi 2「大雨」; huuən 2「大病」; huunəmi 2「大きな波」; huuningəi 2「大きな願い」; huurjāā 2「便所 (huuru より上品な言い方)」; huuru 2「便所」; huuzin 2「大金」; huuzin 2「大きな膳」; hwassun 0「胎盤」; icjən(t)tu 2「漁師」; iijə 0「横穴の洞穴」; iikətə 2「いい方」^{ほう}; iiocki 2「いい天気」; iisi, iisjēē 2「ツノマタ」; iisjuubu 2「優劣つけがたい勝負」; in 2「海」; in 2「縁, ゆかり」; in 2「銛」; inəbēē 2「碎米」; inəkki 2「たて杵」³³; irən 2「クラゲ」; irōōtə 0「西の方」; isju 0「磯」; itəbi 2「イヌビワ」; jəməmi 2「山亀」; jənəūnu 0「魔物」; jəngərəsi 2「鉋」; joo 2「硫黄」; jo'oo (= [joo:]) 0「裏座」; joon 0「闇」; jun 2「弓」³³; kəāāci 2「上下の顎骨」; kaahu 2「檻樓」; kəbusi 2「揺り輪」; kəcjoorə 2「痰」; kəādu 0「竈」; kəi 0「長持」; kəkən 2「女性用袴」; kəkuzi 2「顎」; kəmāā 2「母屋にある竈」³⁸; kəməē 2「小さい亀」; kəməzi, kəāzi 2「吠」; kəmi 2「亀」; kən 0「勘」; kənhuci 2「祈願の文言」³⁹; kənihu 2「野ぶどう」; kərəpən, kərəssjə 0「裸足」; kərəsjaa 0「茶請けを伴わないお茶」; kərəti 0「手ぶら, 唐手」; kəru 0「乳児の頭にできる白い湿疹」; kəsə 2「梅毒」; kəsi, kəci 2「経糸」; kətəru 0「干渴」; kətasi 0「ヒメジ (魚)」; kətəsjaa 0「濃いお茶」; kətəssə 2「頭部にできる臭い湿疹」; kəz(j)ēērə 0「肩胛骨の辺り」; kiburukəzi 0「家ごと」; kidə 0「黒檀」; kinəi 0「世帯」; kizəru 0「年中行事」; kkuzi 2「塵芥」; koobui 2「蝙蝠」; koorəi, kooree 2「胸焼け」; kubiccjə 0「壁」; kubirə 2「鶴」; kunzə 0「こいつ」; kutubə 2「言葉」³³; kuusjube 2「甲イカ」; kuuzi 2「トウツルモドキ」; kuzi 0「手まめ」; ma(a) 2「間」; maazə 2「百足」; məihikiusu 0「靱摺り白」; məine(e) 2「前 (南隣) の家」; məjə 2「猫」; məsi 0「牧」; məsiuci 0「牧の中」; meereta 2「妾」⁴⁰; miizuru 2「雌弦」; minaa 2「巻貝の総称」³³; misjəku 2「供え物の神酒」; mizurudaa 2「深田」; mukəsi 2「昔」; mumunəppə 0「膝枕」; naazuru 2「中弦」; nəgui 2「うねり」; nəi 2「地震」; nərai 2「習慣」³³; nee 2「今晚」; ngədən 2「アカダニ」; nii 2「接するすれす

れのところ」; niibu 2「柄杓」; nnəguru 0「実の入っていない貝殻」; nnəjaa 0「廃屋」; nnəziru 0「実の入っていない汁」; nnməni 2「クロツグ」³³; nnməpəi 2「竹節虫」^{ななふし}; nnzuburaa 2「飯蛸を誘き寄せる時に使う巻貝」; noo 2「頭脳」; nuki, nusi 0「緯糸」; nusən 2「水鶏」; nusi 2「主」³³; nuūtu 2「大きい出来物」; okki 0「天気」; onja 2「お嶽の拝屋」; onpui 2「豊年祭初日の祭事」; ōōsi 2「便所」; həci 0「鉢」³⁷; pəhuki 0「灰吹き」; pii 0「舢先」; pii 0「稗」; piizə 2「山羊」; pin 0「大蒜」; pirə 2「移植鋤」; pisjēē 2「女の子」³³; pjōōrikuunaa 2「かくれんぼ」; pjussi 0「空中の細かい埃」; pjuu 0「鰓」; pjuucjāā 2「マッチ」; pjuurusizi 0「頭のとっぺん（赤ちゃんのも大人のもの）」; poo 2「外」; pootə 2「外の方」; ppi 2「イカ・タコの墨」; pui 2「豊年祭」; saa 0「坂」; saahu 2「咳」; saaməcuni 0「逆まつげ」; səi 2「沼えび」; səmi 0「虫拳の一種」; sənen 2「禪」; sansinbirə 2「しゃもじ」; səppēē 2「しゃっくり」; sibēē 2「宝貝」; sibi 0「宝貝」; sicci, siccjēē 2「乳房」; siici 2「蘇鉄」; sinəi 2「手長蛸」; sinətə 2「格好、態度」; sirə 0「稲叢」; sirətəmunu 2「産褥中燃やす薪」; sirəjaa 2「お産があった家」; sirukə 2「顔にでる斑点」³³; siru'uci 0「屋敷内」; sisi 2「肉」; situ 2「澱粉」; situ'ujə 0「舅、姑」; sizi 0「頂」; sizi 2「唾」; sjuupen 2「杓子」; ssine(e) 2「後ろ（北隣）の家」; soi 2「箕」; ssəhu 2「仕事」; ssubeē 2「疣」; suru 0「釣瓶」; suūru 2「頭」; taadəi 2「高値」; taadəi 2「盃を載せる高台」; təbuūn 2「たばこ盆」; təi 2「松明」; təiusu 0「竹林」; tən 0「炭」; tənsu 2「箆笥」; tənza 0「どいつ」; tee 0「ふんばる力」; teesi, teesjēē 2「野いちご」; tikkun 2「握り拳」; tingusuru 2「釣り糸」; tiru 2「トウツルモドキで作った籠・笊の総称」; toccjāā, toccjēē 2「車輪梅」; tocciki 0「車輪梅」; toohəte 0「平地の畑」; toozi 0「低地」; tossi 2「グアバ」; tui 0「樋」; tuu 0「リーフの外の深海」; ubu 0「神域」; uci 0「内」; ucjōōtə 0「奥の方」; ui 0「上」; unzə 0「あいつ」; urə 2「君（歌謡語）」; urusi 0「塊」; usiru 0「燠」; usjangi 2「兎」³³; utui 2「耳の下あたり」; uūdiru 2「芋籠」; uunəi 2「鰻」; uūzə 2「猪」⁴¹; uzurə 2「鶉」; wəninzə 2「手前^{めえ}」; wənzə 0「お前」; woo 0「君」; zaa 2「ジャコウネズミ」⁴²; zaa 2「座」; zinhukuru 2「巾着、財布」³⁹; zoorə(k)ki 0「行列」

外来語（アルファベット順）

əmerikə 2「西洋」; ənkaa 0「錨」; bəkicci 2「バケツ」; bənko 2「涼み台」; biiru 0「ビール」; buriki 2「ブリキ」; dəidāā 2「ダイナマイト」; gərəsu 2「ガラス」; gəsorin 2「ガソリン」; gumun 2「(消し) ゴム」; heri 2「ヘリコプター」; inki 2「インク」; kəbucjə 0「南瓜」; kamera 2「カメラ」; kasutera 2「カステラ」; kinəi 2「キニーネ」; konkuri 2「コンクリート」; koppu 2「コップ」; penki 2「ペンキ」; rəzio 2「ラジオ」; səpun 2「石鹸」; sjemento 2「セメント」; təbioka 2「キャッサバ」; təbu 2「たばこ」; terebi 2「テレビ」; tomato 2「トマト」; tutən 2「トタン」; zjuusu 0「ジュース」; zubon 2「ズボン」

動詞（アルファベット順）

aarəsUN 0「蒸す」; aarUN 0「上がる」; aasUN 2「合わせる」; aasUN 0「穀粒や豆を穂や茎からとり離す」; əirUN 0「上げる」; əirUN 0「水で薄める」; əirUN 0「(木の実が) 熟れて落ちる」; ənzjun 2「言う」; bəirUN 2「分ける」; bəirUN 0「水で薄める」; bəroon 0「笑う」; beesUN 2「酔わす」; buunUN 0「濯ぐ」; həbəkUN 2「処理する」; həirUN 0「開ける」; itə(t) tirUN 0「零す」; jəndəruN 2「走る」; jubUN 0「吸う, 啜る」; kaaki(ru)N 2「(のどが) 渴く」; kaaron 0「乾く」; kaarUN 0「掛かる」; kəcjəirUN 0「葉をはぎとる」; kəmirUN 2「頭上運搬する」; kəzūirUN 2「隠す, しまう」; kinUN 0「掻き混ぜる」; kkurUN 2「作る」; kon 2「書く」⁴³; koorUN 2「硬くなる」; koosUN 2「隠す」; kubəruN 2「配る」; kubəruN 2「凍える」; kuīruN, kumirUN 0「焼べる」; nbəirUN 0「驚く, 怖がる」; nbirUN 0「植える」; nbirUN 0「焼べる」; nbusun 2「蒸す」; nzuīruN 0「埋める」; pəi(k)kUN 2「弾く」; piroon 2「付き合う」; p'uirUN 0「震える」; saarUN 0「連れる」; saarUN 0「触る」; saarUN 0「空にする」; səboon 2「(魚を) さばく」; sikkirUN 0「沈む」; sikkirUN 0「躓ける」; ssarUN 2「ぶら下がる」; ssjəirUN 2「精げる」; ssjun 0「拾う」; sumirUN 2「(髪を) 刈る」; sumUN 0「積む」; təbənirUN 2「束ねる」; tuməruN 0「止まる」; tumirUN 2「探す」; uppirUN 0「溺れる」; uzumirUN 2「目覚める」; zurirUN 0「濡れる」

謝辞

本稿の竹富方言資料はすべて竹富島玻座間出身の崎山三郎氏（1934年生）の発音を反映するものである。崎山氏とは2012年7月11日から週に一回、計11回の一回一時間ほど面接調査を重ねて来た。氏に対して心より感謝の意を表する。

他の方言の言語資料をご教示下さった方々の名前は注の中で挙げたが、諸氏に厚くお礼申し上げる。また、本稿を草稿の段階で読み、貴重な助言を下された仲原穰氏にも記して謝意を表したい。

なお、本誌査読者から有益なコメントを頂戴した。ここに感謝の意を表したい。

注

¹ これに加えて、「本文編」にアクセントの記入がなくて『竹富方言辞典』の「竹富方言の音韻・文法概説」の中でアクセントが記録されている単語が三つある（「鋤」(p.4), 「毛」(p.6), 「箱」(p.7)）。また、西岡（2012）は『竹富方言辞典』にアクセントが挙がっていない19の動詞のアクセントを発表している。

² 本土日本語ではこのアギは『類聚名義抄』の2類対応の高低（佛中 一一五）および高知「顎」H1（土居・浜田 1985：8）（2・3類対応）、奈良県十津川 2（大島ほか 1979：258-9）（2・3類対応）、東京「脛」2（2・3類対応）のアクセントであられる。

- ³ この語形は加治工（1973：61）にあり、音調は加治工真市先生のご教示による。
- ⁴ この *tu は上代語に見られるチ「鉤」（神代紀（下））の古形である可能性がある。本誌査読者は *turi に由来する可能性について尋ねているが、この再建形なら石垣方言形は *cīri、鳩間方言形は *siru になるはずである。
- ⁵ 音調は宮城信勇先生のご教示による。
- ⁶ 『日本国語大辞典』。
- ⁷ 上野善道先生のご教示による。
- ⁸ 「ダニ」は金田一語類に入っていないが、次の方言のアクセントから2類の単語であると考えられる — 伊吹島 1（上野 1985：130）（2類対応）、岩手 0（森下 1986：293）（1・2類対応）、東京 2（2・3類対応）、島根浜田 2（2・3類対応）、隠岐（2・3類対応）、出雲 0（以上三地点の出典は 広戸・大原（1953））（1・2類対応）。2類は琉球方言のA系列音調に規則的に対応する。鹿児島は B型（橋口 2004a：1004, 1008）（3・4・5類対応）で、例外的である。高知 L2（中井 1997：13）（5類対応）や兵庫県中播 L2（都染 1989：22）（5類対応）は、この地方の方言で小動物の名称が5類のアクセントになる変化の結果であろう。
- ⁹ 十津川方言の tawa 2「峠」（大島ほか 1979：128）が2・3類対応の音調であるから、琉球語のA系列の *tau と同源であるとするれば、「撓」は2類の単語であると推測できよう。
- ¹⁰ 音調は青井隼人氏の調査による。
- ¹¹ 徳之島伊仙町馬根^{ばね}方言では asati「あさって」はC系列音調である。伊仙町立歴史民俗資料館館長の四本延宏氏のご教示による。
- ¹² 八重山でよくある g-脱落のために *inagu > *inau > inoo の後に不規則的な N-添加があったのか、それとも *inago > *inaŋu > *inauŋ (= *inauN) > inoN と不規則的な (ŋ) の音位転換があったのか、検討すべきところである。
- ¹³ 木部ほか（2011：164-6）。
- ¹⁴ 「亀」のB系列音調が報告されている方言は次のものを含む — 徳之島浅間、沖永良部正名、与論麦屋東、大宜味村田嘉里、今帰仁村与那嶺、金武。B-C系列音調で発音する方言に旧名瀬市芦花部、諸鈍、首里、渡名喜などがある。
- ¹⁵ 加治工真市先生のご教示による。
- ¹⁶ 与那嶺方言にA系列音調の mizjuu とC系列音調の mizju もある（仲宗根 1983：542）が、こちらの方はともに借用語であろう。
- ¹⁷ 伊吹 0（上野 1985：135）（1類対応）、高知 H0（中井 1997：21）（1類対応）、愛媛県魚島 2（上野 1988：73）（1・2類対応）、岡山県寒河 0（中井 2002：85）（1類対応）、鹿児島 A型（橋口 2004b：672）（1・2類対応）はすべて1類のアクセントを支持する。岩手 2（森下 1986：491）（3類対応）と徳島 L0（中井ほか 1999：56）（4類対応）の

アクセントは例外である。

- ¹⁸ 『類聚名義抄』の3類対応の低低（佛上 一）および伊吹島方言のカ0音調（上野 1985：127）（3類対応）をはじめ、愛媛県大三島肥海方言（藤原 1988：348）と高知方言（土居・浜田 1985：234）の2・3類対応音調、そして鹿児島方言のB型音調（橋口 2004a：721）（3・4・5類対応）は、併せて考えれば、3類に遡るといえる。
- ¹⁹ 大宜味村田嘉里（ローレンス 2005：69, 75），今帰仁村与那嶺（仲宗根 1983：165），金武（松森 2009：111），久米島真謝（仲原 1997：17），伊是名（伊是名島方言辞典編集委員会 2004：251），首里（国立国語研究所 1963：457），那覇（内間・野原 2006：115），糸満市新垣（宜野座 1996：53）は全部A系列音調で、伊江島（生塩 2009：168）のA-C系列音調はこれと矛盾しない。
- ²⁰ 沖永良部島皆川方言に sani「方向についての感覚」というA系列音調の名詞がある（上野 2005b：183）が、これも *sane「種」と同系かも知れない。
- ²¹ 『竹富方言辞典』には [uba] とあるが、[ubə] である。
- ²² 語源が「世話」であるとすれば、日本語の「世話」のアクセントが参考になる。伊吹島 1（上野 1985：129），高知 H1（中井 1997：12），東京 2 のアクセントはみな 2 類に対応するものなので、琉球祖語のA系列音調と合う。なお、鹿児島方言では「世話」はB型音調（橋口 2004a：909）（琉球のB-C系列対応）であって、これが奄美の音調に影響を及ぼした可能性を考えなければならないであろう。
- ²³ *tube を *-e の母音で再建するのは南琉球方言の母音を説明するためである。例えば、多良間方言の cibi(tar) の -bi は *-be に対応し、*-bi は -bi になる（多良間方言 ibi「蝦」，kabi「紙」，tabi「旅」参照）。「ツベ」は金田一語類に入っていないが、次の方言のアクセントから1類の単語であると考えられる — 愛媛県大三島肥海方言の下中音調（藤原 1988：394）（1類対応），高知 H0（土居・浜田 1985：381）（1類対応），十津川 cubi 0「陰門」（大島ほか 1979：264）（1類対応）。
- ²⁴ 『類聚名義抄』の高高（僧上 一五）および愛媛県大三島肥海方言の下中音調（藤原 1988：559）と高知方言の高平音調（中井 1997：15）はすべて 1 類に対応する音調である。
- ²⁵ 石川県の珠洲と宇出津、そして香川県の引田町では「サヨリ」のことをスズという（石川県水産試験場 1985：11, 32; 近石 1976：316）。珠洲ならびに同じ内浦地域の小木の suzu「サヨリ」は高低音調（2012年11月5日の臨地調査による）で、これは2・3類対応の音調である。
- ²⁶ いくつかの方言では動詞に三つの音調型があると報告されている。管見に入ったものには西表島祖納（金田 2011：44-5），大宜味村喜如嘉（新里 1987：113-4）と奄美大島湯湾（新永・小川 2011）がある。湯湾方言の場合、動詞の三つ目の音調型は新しい

であろうと新永・小川（2011）は考えるが、祖納と喜如嘉の場合は更なる研究が必要であろう。

²⁷ A系列音調が確認できる方言に徳之島亀津（平山 1986：127）、沖永良部島和泊（平山 1986：127）、与論麦屋東（菊・高橋 2005：92, 105）、今帰仁村与那嶺（仲宗根 1983：481）、伊江島（生塩 2009：82）、首里（国立国語研究所 1963：540）などが挙げられる。

²⁸ 岡村隆博氏のご教示による。

²⁹ 仲里政子氏、新垣恒成氏と国吉朝政氏のご教示による。

³⁰ 上野（2012：78, 82）。

³¹ 平山（1986：463）。

³² *buu- になっていないこと、そして北琉球方言と違ってA系列音調になっていないことからこの uu- が借用語であることがわかる。借用語であるから、与那国方言や多良間方言ではC系列音調になっていようというふうに予測が立つ。

³³ 『竹富方言辞典』には 0（平板型音調）とあるが、起伏型である。

³⁴ 前部成素の adi- は北琉球の次の語形にも見られる — 奄美大島旧笠利町佐仁 adēku「自分だけが知っている収穫の穴場」（琉球方言研究クラブ 2003：161）、与論麦屋東 adiku「秘密の場所や居所」（菊・高橋 2005：32）、伊是名 adiku「（たこの住み）穴」（伊是名島方言辞典編集委員会 2004：26）。このうち、与論と伊是名の語形はC系列の音調である。

³⁵ 『竹富方言辞典』には [bubəma] とあるが、[bubəmə] である。

³⁶ 『竹富方言辞典』には [burə:] とあるが、[bura: ~ bura:] である。

³⁷ 『竹富方言辞典』には 2（起伏型音調）とあるが、平板型である。

³⁸ 『竹富方言辞典』には [kəmə:] とあるが、[kəmə:] である。

³⁹ 『竹富方言辞典』では [...mɸ...] になっているが、[...Nɸ...] であって、[mɸ] の音連続はこの方言には認められない。

⁴⁰ 『竹富方言辞典』には [me:retə] とあるが、語末母音は [a] である。

⁴¹ 「猪」を意味する語形として、八重山諸方言に umuza系と kamai系のものがあり、次のような分布をしている。

umuza系: 石垣, 川平, 竹富, 黒島, 波照間 (muza), 与那国 (umuda)

kamai系: 小浜, 新城 (kaman) (久野 1992：22, 30), 古見, 西表祖納 (前大 2002：33), 鳩間

この分布は方言の系統分岐（例えば加治工 1984：300 やローレンス 2000 に見られる案）の分かれ方と一致しないのである。kamai系語形は西表島を中心に分布し、umuza

は地理的に周辺の分布をとっている。これは *kamai は西表島でできた語形で、そこから近隣の島に流布したもので、その周囲に分布する umuza系の語形が古いと言えよう。なお、umuza に関して、池宮（1993）は次のおもしろい語源説を提案している。

「景行天皇記の倭建命の東征伝の一節で、伊吹山の山の神を退治しようと登って行くと、途中で牛のように大きな白い猪に会う。しかし山の使いだろうと思い、帰りに退治しようといってどんどん登って行くと、大変な氷雨が降って命を悩ませた。あの白い猪は神の使いではなくてその神そのもの、つまり正身（むざね）であったのだ、とある。語義不明の「ウムザ」「ムザ」は「むざね」の「ね」の脱落した形に符合し（ウは接頭語）…」
池宮（1993：197）

この語源説が正しいとすれば umuza は借用語ということになる。それは「御 + 二拍」という略し方（例えば、出来物 > おでき、なすび > おなす、^む身^きつ着 > おむつ、お目覚め > おめざ）は琉球語にみられるものではないからである。

⁴² 『竹富方言辞典』では「ハツカネズミ」となっているが、インフォーマントによるとジャコウネズミであろうという。

⁴³ 『竹富方言辞典』には ko(o)_N の他に kakun が載っている。こちらが平板音調となっているが、誤りであろう。

参考文献

- 五十嵐陽介・田窪行則・林 由華・久保智之 2011.「琉球語宮古池間方言の三型アクセント体系」（「日本語レキシコンの音韻特性」・「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」合同研究会、於国立国語研究所 2011年7月17日）.
- 石川県水産試験場（編）1985.『石川県魚類方言集』石川県水産試験場.
- 伊是名島方言辞典編集委員会（編）2004.『伊是名島方言辞典』伊是名島教育委員会.
- 池宮正治 1993.『沖縄ことばの散歩道』那覇：ひるぎ社.
- 内間直仁・野原三義 2006.『沖縄語辞典 ― 那覇方言を中心に ―』東京：研究社.
- 上野善道 1977.「徳之島浅間方言のアクセント(1)」岩手国語学会論集刊行会（編）『小松代融一教授退職・嶋稔教授退官記念国語学論集』188-220（1-33）.
- 上野善道 1985.「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40.2: 75-179.
- 上野善道 1988.「愛媛県魚島方言の名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』17: 59-80.
- 上野善道 1996.「名瀬市芦花部・有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』15: 3-68.
- 上野善道 2005a.「沖永良部島方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』29: 1-40.

- 上野善道 2005b.「沖永良部島方言のアクセント資料(2)」『アジア・アフリカ文法研究』33: 155-204.
- 上野善道 2006a.「沖永良部島方言のアクセント資料(3)」『琉球の方言』30: 1-49.
- 上野善道 2006b.「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(4)」*Asian and African Languages and Linguistics* 1: 129-58.
- 上野善道 2010.「琉球与那国方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』34: 1-30.
- 上野善道 2012.「与那国方言動詞活用 of the アクセント資料(3)」『琉球の方言』36: 57-91.
- 大島一郎・久野マリ子・平澤洋一・久野眞 1979.「語彙の研究」平山輝男・大島一郎・久野マリ子・平澤洋一・久野眞 (編)『國學院大學 日本文化研究所紀要』43: 127-415.
- 大山茂子 1962.「琉球方言における二音節名詞のアクセント」『琉球方言』4: 3-56. 琉大方言クラブ.
- 岡村隆博 2007.『奄美方言 カナ文字での書き方』鹿児島: 南方新社.
- 岡村隆博・沢木幹栄・中島由美・福嶋秩子・菊池 聡 2006.『徳之島方言二千文辞典』信州大学人文学部.
- 生塩睦子 2009.『新版 沖縄 伊江島方言辞典』伊江村教育委員会.
- 加治工真市 1961.「鳩間方言の音韻体系について」『琉球方言』3: 3-55.
- 加治工真市 1973.『沖縄県八重山鳩間島方言』(方言録音資料シリーズ15). 東京: 国立国語研究所.
- 加治工真市 1982.「沖縄県竹富町方言」『全国方言辞典 2』386-96. 東京: 角川書店.
- 加治工真市 1984.「八重山方言概説」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編)『講座方言学 10 沖縄・奄美地方の方言』289-361. 東京: 国書刊行会.
- 加治工真市 1986.「鳩間方言の漁業語彙」『琉球の方言』10: 1-24.
- 加治工真市 1987.「八重山方言の比較音韻論序説」琉球方言研究クラブ30周年記念会 (編)『琉球方言論叢』93-117.
- 加治工真市 1989.「鳩間方言の農業関係語彙」『琉球の方言』13: 160-205.
- 加治工真市 1990.「鳩間方言 — 食関係語彙 —」『琉球の方言』14: 32-89.
- 加治工真市 1991.「鳩間方言の住関係語彙」『琉球の方言』15: 51-106.
- 加治工真市 1992.「鳩間方言の祭祀関係語彙(1)」『琉球の方言』16: 56-104.
- 加治工真市 1993.「鳩間方言の祭祀関係語彙(2)」『琉球の方言』17: 61-87.
- 加治工真市 1998.「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学』10: 265-320. 沖縄県立芸術大学付属研究所.
- 加治工真市 2001.「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学』13: 1-101. 沖縄県立芸術大学付属研究所.
- 加治工真市 2002a.「竹富方言の基礎語彙 — 分野 6 (食), 7 (住居) —」『琉球の方言』26:

47-90.

加治工真市 2002b. 「八重山・鳩間方言」『国文学 解釈と鑑賞』67.7: 59-76.

加治工真市 2012. 「続古見方言の基礎語彙」『琉球の方言』36: 29-55.

木部暢子、窪蘭晴夫、下地賀代子、ローレンス・ウエイン、松森晶子、竹田晃子 (2011) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』国立国語研究所 共同研究報告 11-01.

金田章宏 2011. 「八重山西表島（祖納）方言動詞の活用タイプ」『琉球の方言』35: 39-58.

狩俣繁久 1996. 「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム（下）」『日本東洋文化論集』2: 1-57. 琉球大学法文学部.

菊 千代・高橋俊三 2005. 『与論方言辞典』東京：武蔵野書院.

宜野座嗣郎 1996. 『アラカキクトゥバ』私家版.

金田一春彦 1974. 『国語アクセントの史的研究 — 原理と方法』東京：塙書房.

金田一春彦 1980. 「味噌よりは新しく茶よりは古い — アクセントから見た日本祖語と字音語 —」『月刊言語』9.4: 88-98.

久野マリ子 1992. 「新城下地島方言のアクセント」國學院大學日本文化研究所（編）『南琉球新城島の方言』14-35. 國學院大學日本文化研究所.

国立国語研究所（編）1963. 『沖縄語辞典』東京：大蔵省印刷局.

古波蔵香苗 2003. 「沖縄北部諸方言との比較における久志方言の音韻体系」未刊修士論文. 名桜大学.

崎村弘文 2006. 『琉球方言と九州方言の韻律的研究』東京：明治書院.

新里幸昭 1987. 「大宜味村喜如嘉方言の音韻の研究」『あじまあ』3: 103-53. 名護博物館紀要.

高江洲頼子 2002. 「渡名喜島方言の音韻」狩俣繁久・津波古敏子・加治工 真市・高橋俊三（編）『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』243-62. 「環太平洋の言語」成果報告書 A4-019.

近石泰秋 1976. 『香川県方言辞典』東京：風間書房.

都染直也 1989. 『兵庫県中播地方方言アクセント資料 — 姫路市・夢前町・香寺町・家島町における三世代の二・三拍体言 —』科学研究費補助金奨励研究（A）課題番号 63710235.

寺師忠夫 1956. 『奄美方言 第二編 アクセントについて』私家版.

土居重俊・浜田数義 1985. 『高知県方言辞典』高知：高知市文化振興事業団.

徳富重成 1975. 『徳之島尾母方言集（一集）』私家版.

中井幸比古（編）1997. 『高知市方言アクセント小辞典』文部省科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号09610542「京都アクセントの記述調査研究と辞典作成」研究成果報告書.

中井幸比古・高田豊輝・大和シゲミ（編）1999. 『徳島市方言アクセント小辞典』文部省科

- 学研究費補助金基盤研究（C）課題番号09610542「京都アクセントの記述調査研究と辞典作成」研究成果報告書.
- 中井幸比古 2002.「岡山県寒河方言のアクセント」上野善道（編）『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究 3』55-142.「環太平洋の言語」成果報告書 A4-013.
- 仲宗根政善 1983.『沖縄 今帰仁方言辞典』東京：角川書店.
- 仲原 穰 1997.「沖縄久米島真謝方言の記述的研究 資料編 沖縄久米島真謝方言基礎語彙一覧」未刊修士論文. 沖縄県立芸術大学.
- 新永悠人・小川晋史 2011.「北琉球奄美湯湾方言のアクセントについて」（「日本語レキシコンの音韻特性」・「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」合同研究会、於国立国語研究所 2011年7月17日）.
- 西岡 敏 2012.「言語資料 竹富島の弱変化動詞・活用一覧」『沖縄芸術の科学』24: 33-65. 沖縄県立芸術大学附属研究所.
- 橋口 満 2004a.『鹿児島方言大辞典 上巻』鹿児島：高城書店.
- 橋口 満 2004b.『鹿児島方言大辞典 下巻』鹿児島：高城書店.
- 平山輝男 1986.『奄美方言基礎語彙の研究』東京：角川書店.
- 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野 眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）1992a.『現代日本語方言大辞典 2』東京：明治書院.
- 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野 眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）1992b.『現代日本語方言大辞典 3』東京：明治書院.
- 平山輝男・中本正智 1964.『琉球与那国方言の研究』東京：東京堂.
- 藤原与一 1988.『瀬戸内海方言辞典』東京：東京堂出版.
- 前新 透 2011.『竹富方言辞典』石垣：南山舎.
- 前大用安 2002.『西表方言集』私家版.
- 松森晶子 2000.「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発 — 沖永良部島の調査から —」『音声研究』4:1. 61-71.
- 松森晶子 2009.「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその類別 — 「琉球調査用系列別語彙」の開発に向けて —」『日本女子大学紀要 文学部』58: 97-122.
- 松森晶子 2010.「多良間島の3型アクセントと「系列別語彙」」上野善道（監）『日本語研究の12章』490-503. 東京：明治書院.
- 宮城信勇 2003.『石垣方言辞典』那覇：沖縄タイムス社.
- 森下喜一（編）1986.『岩手方言アクセント辞典』東京：第一書房.
- 琉球方言研究クラブ 2003.『琉球方言 第18号 奄美大島笠利町佐仁方言の基礎語彙と民俗語彙』
- ローレンス・ウエイン 1997.「鳩間方言のアクセント — 名詞」『沖縄文化』32.1: 1-26.

- ローレンス・ウエイン 2000.「八重山方言の区画について」石垣繁（編）『宮良當壯記念論集』
547-59. 那覇：ひるぎ社.
- ローレンス・ウエイン 2005.「大宜味村田嘉里方言の音調体系」『琉球の方言』 29. 67-85.
- ローレンス・ウエイン 2010.「大宜味村方言の音韻について — 附 大宜味村四地点音調資
料 —」『琉球の方言』 34: 109-124.
- ローレンス・ウエイン、岡村隆博 2009.「徳之島浅間方言の俚言名詞アクセント資料」『琉
球の方言』 33: 173-80.
- Serafim, Leon 1984. *Shodon: The prehistory of a Northern Ryukyuan dialect of Japanese*.
Yale University PhD dissertation.

附 竹富島方言版「北風と太陽」

イソップ寓話の一つである「北風と太陽」の話を竹富方言話者である崎山三郎氏に方言訳していただいたのを録音して、その一旦録音したものを文字化してここに掲げる。音調は上線で、そして単語の音調型は上付き記号で表す。なお、実際の音声は <http://artsfaculty.auckland.ac.nz/staff/?UPI=wlaw016&p=5557> で聞くことができる。

⁰nisikəzi-tu ²tidə-nu ²hənəsi-ju ⁰sii-ssjəru-naara[↑]
 北風-と 太陽-の 話-を して-あげ-ます (申し上げます)
²əru ²bəsjuu ⁰nisikəzi-tu ²tidə-jə ⁰taa-du ²sjuusəru-tti ²hikərəsjuubu-ju ⁰siiru ²kutu-ī
 ある 時 北風-と 太陽-は 誰-ぞ 強い-と 力勝負-を する こと-に
²nəttə-ttin-juu
 なった-とさ
²umə-ī ²gəitoo-ju ⁰ssitti ²ərəi-kuu ⁰hitu-nu ⁰buttə-ttin-juu
 そこ-に 外套-を 着て 歩いて-来る 人-が いた-とさ
⁰nisikəzi-tu ²tidə-jə ⁰ənu ²gəitoo-ju ²həzirəsi-ssittaa ²kəci-tti ²kimi ⁰nisikəzi-hərə
 北風-と 太陽-は あの 外套-を 脱-がし-できたら 勝ち-と 決め 北風-から
⁰həziiru ²kutu-ī ²nəttə-ttin-juu
 始める こと-に なった-とさ
⁰nisikəzi-jə ²noo-nu ⁰ənu ⁰hitu-nu ⁰ssiru ²gəitoo-jə ²baa ²hituhuki-ssi ⁰tubəsi
 北風-は 何-の あの 人-が 着ている 外套-は 私が 一吹き-で 飛ばして
²misirun-tti ²hukiccaasuttə-ttin-juu
 見せる-と 激しく吹いた-とさ
²əi-tu ²gəitoo-ju ⁰ssiru ⁰hitu-jə ⁰kəzi-nu ²huku-sindee ²sizjəōri
 そう (する) -と 外套-を 着ている 人-は 風-が 吹く-につれ 縮こまって
²gəitoo-ju ²gaan-ti ⁰kəci ⁰naarə ²duu-ī ⁰usukkittə-ttin-ju
 外套を しっかり-と 握って 自分の 体-に 押し付けた-とさ
²kundu-jə ⁰tidə-nu ²bən ²nəri ⁰tidə-jə ²kumu-nu ²maa-hərə ⁰bərə(i)-ssi-ttənaan
 今度-は 太陽-の 番-に なって 太陽-は 雲-の 間-から 笑み-し-ながら
²uūti-ju ²nzəsi ²pikəri ²nussaa-nussai ²tirəsuttə-ttin-ju
 顔を 出して 光って ぬくぬくと 照らした-とさ

²nəmə-mədi ²piisə-si ²sizjə̃rittəru ⁰hitu-jə ²səttə-səttə ²nuci-mui-sunu-yoosi
 今-まで 寒さ-で 縮こまっていた 人は 徐々に 生き返った-ように
²sənii-sənii ²nəri ²əikəsi ²tədaai ²əcə ²nəri ²gəitoo-ju ²həziruttə-ttin-jū
 気持ちよく なって そのうち どんどん 熱く なって 外套-を 脱いだ-とさ
²əiti-du ⁰nisikəzi-nu ⁰məki-tti ²nəttə-ttin-juu
 そうして-ぞ 北風-の 負け-と なった-とさ
⁰ssəree
 失礼しました